

多様性が織り成す創造する力

～想像し創造へ～

○星 希望

(あおぞら銀行 人事部 人事グループ 調査役 精神保健福祉士/企業在籍型職場適応援助者)

1 はじめに

当行では様々な障がいのある行員がそれぞれの適性を活かし、各部門で活躍している。障がいの状況に応じて個別の配慮をしているが、全員が同僚と同じ仕事をしているため、働いているときは自身に障がいがあることを忘れてしまうという声もある。誰もが働きやすい、そしてやりがいを感じられる職場を目指し、行員の声に耳を傾けることを心掛けており、今回は多様な個性を尊重し合い生み出された新しい取り組みについて紹介する。

2 多様な個性を尊重する取り組み

当行グループでは経営理念として定めた「あおぞらアクション（行動指針）」の1つに「仲間の多様な生き方、考え方、働き方を尊重し、仲間の成長を支援する」がある。1人1人の声に耳を傾け、より良い職場環境づくりを追求するとともに、当事者だからこそその気づきやアイデアを活かし、全行で多様性の理解を深める取り組みを続けている。

(1) ディスクロージャー誌（統合報告書）作成への参画

昨年引き続き、当行のディスクロージャー誌（統合報告書）作成にあたり、障がいのある行員から希望者を募り、「障がいのある従業員が安心して働ける環境づくり」のページ作成を進めた。当行の取り組みを知っていただくことで、障がい者と一緒に働くことについて考えるきっかけになればとの思いにより、昨年より多くの行員が参加、普段の仕事や取り組みをしている様子の写真、参加者が日常感じていることをそのままの形で掲載している（図1）。

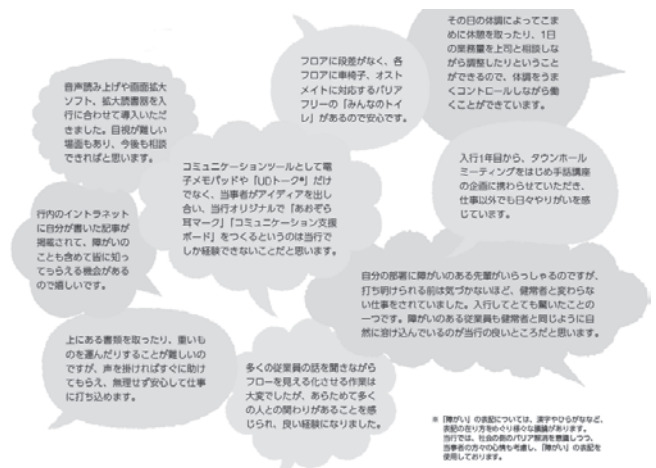


図1 ディスクロージャー誌（統合報告書）2023一部抜粋

(2) 「スモールミーティング」の開催

これまでも社長をはじめとする業務執行役員と障がいのある行員が直接対話を行う「スモールミーティング」を実施してきたが、コロナ禍により少人数やオンラインでの実施となっていた。今年は、ディスクロージャー誌（統合報告書）作成に携わった者を中心に、様々な障がいのある行員が一堂に会し、社長も参加して「スモールミーティング」を行った。当行では障がいのある行員は、様々な部署で働いており、自身で話さない限りは同僚の悩みや工夫などの状況を知ることはないため、参加者にとって多くの気づきを得る機会となった。本来のスモールミーティングはその場で意見交換していくが、個々に状況が異なるため事前アンケートをもとにスライドにまとめ、その内容も事前に参加者が確認できるよう工夫した（図2）。

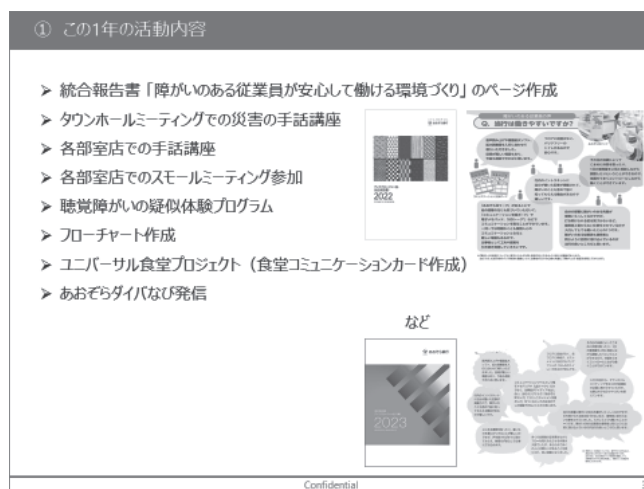


図2 スモールミーティング資料①

併せてディスクロージャー誌（統合報告書）作成の感想についても共有し、それぞれ状況が異なっても思いは皆同じであること、以前はどこかで引け目を感じていたものの本作成を含む様々な取り組みに関わる中で積極的に前向きに考えられるようになった「心の変化」があったことなどを共感し合った。

取り組みを推進していくことも大切であるが、皆であらためて振り返ることで新たな気づきがあり、こうしたPDCAサイクルをまわしていくことで、今後の取り組みやより働きやすい環境づくりに向けての意見交換にも繋がっている（図3）。

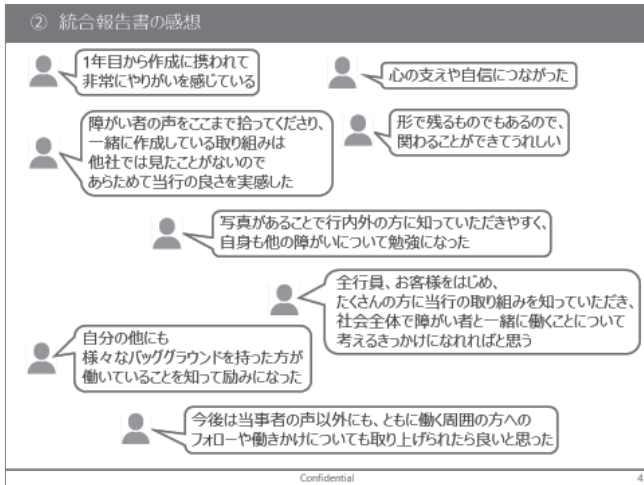


図3 スモールミーティング資料②

(3) 当行オリジナルの聴覚障がいの疑似体験プログラム

障がいについて、見た目にはわかりにくい、伝わりにくい障がいもあることから、周囲の行員は障がいのある行員がどのような状況であるか想像することになる。当行には聴覚障がいのある行員が多く、例えば発話が明瞭な聴覚障がいのある方では、実際の聴こえの状態が周囲にはわかりにくい面がある。そこで当行の聴覚障がいのある行員の発案により、聴こえない状況を体験する聴覚障がいの疑似体験プログラムの作成を進めた。既存の対面での聴こえない疑似体験プログラムを元に、外部の専門家にもご意見をいただきながらオンラインでも実施できるよう当行オリジナルのプログラムとして作成、現在トライアルで少しずつ行内展開し試行を重ねている（図4）。



図4 聴覚障がいの疑似体験プログラム

(4) タウンホールミーティングでの手話講座

当行グループでは経営陣と役職員が直接双方向にコミュニケーションをとる機会の1つとしてタウンホールミーティングを実施しており、昨年は3年ぶりに3つの会場とオンラインでのハイブリッド形式で開催した。タウンホールミーティングで実施してほしい企画についてグループ全体にアイデアを募ったところ、1年目の聴覚障がいのあ

る行員より、皆が集うこの機会に災害時に使える手話について、皆で覚えられたら良いのではないかと提案があった。災害が起きた際の状況を知る手段の多くがサイレンや放送などとなっている。聴覚に障がいのある方にとっては見える情報が必要となるが、UDトークや電子メモパッドなど便利なツールはあるものの、一刻を争うような有事には使える状況にないかもしれないことにあらためて気づかされた。また災害はいつでもどこで起こるか分からないものであるため、ともに働く仲間だけでなく、お客様や地域の方など、手話で伝達することで誰かの安全安心に繋がればという想いも重ね、発案者の行員が講師となって、皆で災害時に使える手話を学んだ（図5）。

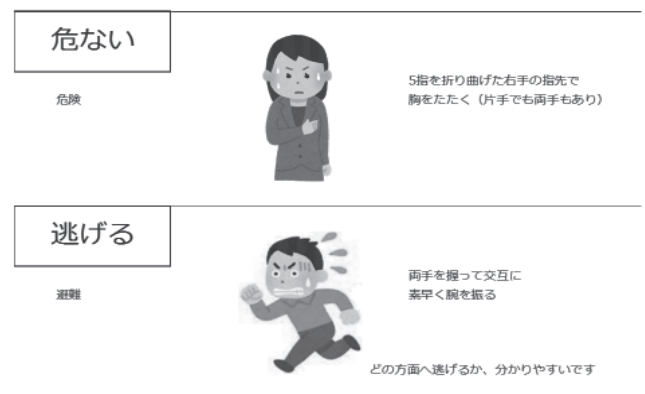


図5 タウンホールミーティングでの手話講座

3 今後に向けて

前述の取り組みをはじめめる際、様々な障がいのある行員から「相手の状況をどこまで理解し配慮できるだろうか」「自身の状況をわかってもらえるだろうか」といった不安の声が寄せられた。実際は悩みも、そして新しいアイデアも共感するところが多くあり、取り組みをきっかけに新たな交流も生まれている。そうした交流の中からまた新しい発想や取り組みが生み出されることで、誰もが働きやすい環境により近づけられるのかもしれない。

まったく同じ人はいないし、誰もがかけがえのない1人であるからこそ、様々な意見や想いが交錯する。そこで違いだけを意識するのではなく、その意見や想いはどこからきているのか思いを巡らし、お互いを尊重しながら対話を重ねていくことで共通点や気づきがあると考え。今後も1人1人の声に耳を傾け、皆で共有し取り組むことを続けていきたい。

【連絡先】

星 希望
あおぞら銀行 人事部 人事グループ
Tel : 050-3138-7211
e-mail : n.hoshi@aozorabank.co.jp